

釣れ釣れなるままに

2009年思い出の釣行記 PART. 1



Let's enjoy fishing

鹿島釣狂

岩見沢釣遊会第1回大会

☆開催日	平成21年04月19日
☆開催場所	須築港～瀬棚港
☆入釣場所	梅花都
☆釣果	ホッケ 445 mm 2
	アブラコ 401 mm 1
	カジカ 2
	重量 3880 g
☆成績	合計点数 1234 点
	優勝

ユラユラ仕掛け

納竿期は釣り場に思いを巡らす。仕掛けにもアレコレと工夫を凝らしてみる。大会で大物を4本揃えたが、あと1本の異魚種を釣ることが出来ずに悔しい思いをすることがあった。そこで、食い渋ったホッケやアカハラをモノに出来るようにと自称「ユラユラ天秤仕掛け」に改良を加えてみたのだ。この仕掛けは「北海道の釣り」で紹介された中村正方氏のものを真似て作ったもので実釣でもそれなりの釣果を得ていたのだが、何度かの釣行時に不具合が見つかったので改善しようと試行錯誤を重ねたのである。すると、道糸を張ったりゆるめたりすることで天秤の先が回転を伴って上下するようになった。お蔭で、思っても見なかった怪しげな動きが出て、更に魅惑的に魚を呼び寄せることが出来るようになったと信じている。

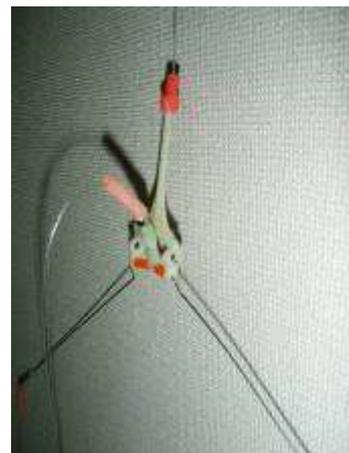
①



②



③



- ①糸をゆるめると天秤の先が下がる。同時にネットから出たマキエの周辺にハリが来る。
- ②糸を張ると天秤の先が回転して上がり、その動きがハリに連動し誘いになる。
- ③その仕組みは、ステンレス線を折る曲げることで偶然に出来た。

しかし、これでは、べた凧時には絶えず竿を動かしていなければならない。そこで、僅

かな潮の動きでも仕掛けが揺れるようにと、さらに仕掛けの上部に発泡スチロール製の赤の浮き球を付けてみた。早く試してみたいものだ。

政権交代

平成21年岩見沢釣遊会総会で、今年の大会日程や他会との交流、会規約や大会規定の見直しについて慎重な論議を得て今後の活動計画について承認された。そして新会長には前野達志氏を選出した。

規約では不慮の事故等、万が一に備えて念書を提出することになっていたが、曖昧になっていたことや他会でも海難事故が相次いでいることもあり再度確認された。また、大会の審査規定についても最近の釣りの状況から見直しされた。出来るだけ多くの会員が顕彰されるようにと、基準が少しゆるやかになったのだ。審査対象魚はカレイ類からタカノハを独立させて10魚種とした。また、年間大物賞は50cm以上のアカハラ、45cm以上のアブラコ、カジカ、カレイに限られていたが、身長制限を設けずに全ての魚種にわたって顕彰されることとなった。しかしそれでは、各大会での審査に時間がかかることから、2魚種身長の提出魚のみとした。それゆえ各会員は審査に提出する魚をどれにするかを悩まなくてはならなくなったのだ。

今回の第1回大会でも堀内氏が頭を抱え込んだ。堀内氏が提出した魚は、アカハラ2、アブラコ1、ソイ2である。婿のアカハラは45cmを超えているので問題はないが、嫁に36cmのアブラコか34cmのソイのどちらを提出するかを決めなくてはならなくなったのだ。今回の審査に出された魚の様子では、私か堀内氏のどちらに優勝が転がり込んでもおかしくない状況である。2cmは点数にして20点、際どい接戦ではひっくり返されることもありうるのだ。しかし、ソイを嫁にすれば年間大物賞の可能性もあるのだ。さあ、どうする？ 堀内氏が出した答は「アブラコを嫁にする」だった。今後の大会のこともありソイの34cmでは年間大物賞には手が届かないと判断したのだろう。ハチガラならアブラコに替えて嫁にしたのだろうに・・・、結果は末尾をご覧頂きたい。

アレルギー性鼻炎

3月末より目がかゆくなり涙が出てくるようになった。寒暖の差が激しく鼻風邪にでも罹ってしまったのだろう。神妙な面持ちで講話をしている間にも涙が出て、それが鼻からもツーツと下りてくる。悲しい話なら感極まったと誤魔化せるところなのだがそうもいかない。何とか耐え堪えてその場を繕った。

女房に話すと花粉症ではないかという。まだ桜も咲かない北海道だが、最近是中国からの黄砂が舞っているのがそれが原因ではないかと考えたらしい。私はアレルギーには無頓着に育ってきた。今までに辛い思いをしている同僚を多く見てきたが私には縁遠いと思っていたのだ。

ある日、職場の自室に入ると一気に涙が溢れてきた。同僚に話すと部屋に置いた鉢花が

原因ではないかという。シクラメン、ゼラニウム等の花々が今までになく満開なのだ。部屋に花粉が無いアレルギー性鼻炎に罹ったのではないかと言う。満開になった花を摘んで、窓を開け放ち空気を入れ換えてみる。なるほど以前よりは幾分よくなった気がする。1ヶ月ほど後遺症は続いたが、目薬で何とか耐え忍んだ。

私は目薬を差すのを大の苦手としている。しかたなく目薬を差さなければならない時は、ソファーに横になってからでないと差すことが出来ない。しかも、まともに瞳に落ちてくれない。懸命に目を見開くのだが、目薬の一滴が落ちてくる瞬時に上瞼が落ちてしまうのだ。女房がそれを見て、普段は偉そうにしているが根は臆病なのだとケラケラと笑う。目薬ぐらいで大袈裟なといたいらしい。

目薬のフタをとって手の届くところに置き、その脇にティッシュを添える。頭の位置を座布団で確保しながらソファーに横たわる。なるべく瞳に近づけて目薬を落とす。小さな滴が瞳の前でみるみる大きくなってきて目の前が暗くなる。一滴では心許ないとして何滴も落とす。今度は指で瞼をこじ開けて、瞼の上に溜まった目薬を強制的に瞳に流し込む。その後、目をパチクリさせながら瞳全体にゆき渡らせるのだ。ティッシュで拭き取った目薬の量は瞳を潤した何倍にもなる。そんなわけで、女房に比べて目薬を差す機会は滅多にないのだが目薬の量ははかがいく。こんな私でも海に潜って小魚たちと遊んでいるときには目を全開にしているのだ。全く不思議である。女房が大袈裟だというのも領けないでもないが、反射神経がよすぎるのだとしておこう。

Let's enjoy fishing

岩見沢釣り具センターの開店を告げる広告が新聞の折り込みチラシに入っていた。広告には余念のない女房が目ざとく見留め私に差し出したのだ。開店に伴うバーゲンに、フローテングベスト、フィッシングキャスター、バックンがあったのでそれらを購入した。

フローテングベストは圧縮した酸素ボンベ仕様の携帯ベストが高価なために手が届かなかったもので、ウレタン製の物にした。今まで着ていた擦り切れたフィッシングベストとは違い、使い勝手の良さそうなポケットがたくさん付いている。また、防寒にもなりそうだ。しかし、これはリュックを担ぐときに差し障りがあった。ウレタンが分厚くて、リュックの肩ベルトに手を通すときに腕が引っ掛かってしまうのだ。どういたしましょうか？

ネズミに食われてリュックに穴が開いてしまった。リュックの上と下との仕切にネズミ1匹分の通り道を作っており、2階建ての屋敷を築いていたのだ。昨年11月の大会の準備をしている時にその穴を発見した。冬になる前に野鼠が物置に侵入し、リュックの中に巣を作ったのだ。物置の中にあつたカーペットなどの布製の物を念入りに細かく千切ってリュックの中に作った巣の周りを被っている。巣作りの真最中だ



ったのか、幸にも赤子の子鼠はいなかったが、気分が悪い。

そこで、リュックの代わりにキャリーカートにバックとハードバックの荷物を積んで運ぶことにする。キャリーカートの値札の上には「的吊牌 Mede In China」と書かれてある。「的吊牌」とは中国語で何と読むのだろう。「テキチョウハイ」とでも読むのだろうか。「吊す札として当を得ている」日本でいう J A S 規格品のように、中国政府の審査を得た優良品という意味だろうか。偽装で名高い中国のことだから信用するにはいたらない。

一方、値札の下には「耐荷重 5 0 kg」と書かれてある。この言葉を信用したために初めて使用したワスリの釣行ではひどい目に遭うことになった。1 3, 5 0 0 円の価格を 3, 9 8 0 円に値引きされていたので致し方のないところか。

キャリーカートに積む 2 5 ㊦ハードクーラーバッグの価格も 1 1, 5 0 0 円から 2, 9 8 0 円と割引されていたので購入する。どちらの商品も「AQUA SPORT」製である。その商標には下の英語が書かれていた。そう願いたいものである。

Will you start fishing? Let's enjoy fishing do all families Everyone can do easily
--

梅花都

今大会の入釣場所の第一候補に梅花都をあげていた。「北海道のつり」の巻頭写真で笹崎氏によって紹介されていたのだ。この平盤は嵐氏が得意とするところなので彼の行き先を確認すると中歌漁港右方向に向かうという。それですぐさま「俺は梅花都」と宣言させていただいた。

中歌漁港の端っこで降ろしてもらおう。漁港の防波堤の上から脇に付いた平盤方向に向かって竿を振っている釣り人が沢山いる。最初の入釣場所にと考えていたこの低い平盤には波が乗っており、あきらめて先の梅花都平盤へと進む。平盤先の頭は出ており、そこへの道程は深くても膝ぐらいまでだと聞いていたのだが、真っ暗な上に波が高くて出て行くにはチト気持ちが悪い。そこでやむなく付近の舟揚場で竿を出すことにした。



梅花都平盤には磯際の水中平盤の様子がわからずに入釣を断念する。明るくなってから瀬棚方向を望むと三本杉岩、ローソク岩が屹立していた。

この舟揚場は潮通しも悪そうで、魚がいる気配を感じないが、イカゴロ天秤ネット仕掛けを近投する。すると、次の竿を準備している間にもガタガタと竿がお辞儀をする。引き上げると35cm程のカジカがイカゴロに食いついていた。続けてカジカ30cm。更に向かいの根際に打っていた竿にアブラコ特有のアタリが出て、手元にくるまで鋭い突っ込みを見せながら40cm級のものが上がった。その後もホッケが続き2魚種5尾が早々に揃ってしまった。

空が白み始めてアタリの間隔が長くなり移動場所を探しに行くと、波の治まった手頃な溝を発見したので移動する。海藻が豊かに育っているようで根掛かりも少ない。ここではホッケのアタリが間断なく続いた。足場は大きなゴロタ場で移動するのに手間取るため、三脚を2本立ててその間に陣取る。1本の三脚だとアタリの度に竿を跨ぐ必要があり素早い対応が出来ないのだ。足元にエサ、バツカン、仕掛け等を置いて移動を極力避けるようにする。その内に本日の頭となった45cm級のホッケもイカゴロに食いついてきた。天秤仕掛けに2本ずつ付けていたゴロが心許なくなり1本にし、片方のゴロ針には身エサを付けて振り込む。それでもホッケばかりが釣れ続いたのでイカゴロ、コマセを外して身エサだけにして遠投するがやはり釣れてくるのはホッケのみである。



移動した釣り場の足元はゴロタ場で少し動くにも骨が折れる。そこで、三脚を2本立ててその間でエサ付け等の作業をする。アタリの度に竿を跨がなくなったのでアタリにすぐに対応できるようになった。

すっかり明るくなって漁港脇に付いた波かぶり平盤の様子を見に行くと、途中までなら何とか出られそうである。安全のためにスパイクを付けてから平盤に乗ると、その周辺は荒根で取り囲まれており海藻も豊かに生い茂っている。アブラコを狙ってその根の周りを探るが最後までホッケだけしか釣れなかった。



春爛漫である。朝方から日が昇り、汗が噴き出してきた。頭を守るために帽子だけはかぶったままにしたが、防寒着を脱ぎ新調したフローテングベストもあって快適な釣りとなった。

漁港右脇に付いた平盤全景。先端の平盤には写真にあるような波が溝を伝い渡ることが出来ず、中間の平盤で竿を出す。沖に見える岩の手前がホッケの魚道になっているようだ。

審査結果

優勝	鹿島釣狂	1 2 3 4 点	(ホッケ 445mm+アブラコ401mm+3880g)	梅 花 都
準優勝	谷口良幸	1 0 3 6 点	(アブラコ408mm+ホッケ 360mm+2680g)	白 岩
3 位	西川紘一	1 0 1 4 点	(カジカ 374mm+アブラコ340mm+3000g)	オホン泊
4 位	相馬義博	1 0 0 6 点	(アカハラ389mm+カジカ 385mm+2320g)	須築漁港
5 位	吉井 博	9 8 9 点	(ホッケ 399mm+アブラコ342mm+2480g)	オホン泊
身長優勝	堀内正博	1 1 8 5 点	(アカハラ462mm+アブラコ357mm+3660g)	瀬棚漁港

審査結果は私が1 2 3 4点という語呂のよい点数で優勝させていただいた。ホッケはどこでも湧くように釣れてそれぞれのバックンを重くしてきたのだが、頭にするような大物が出なかったのだ。皆さんホッケが大漁だったこともあり、途中のコンビニで氷を買って

生きのよいまま隣近所に配るといので、私もそれに習った。

家に戻って優勝を女房に報告してから少し熱めに湯を張った風呂に入った。ホッケの口の中に指を差し込んでハリを外していたためにその傷口がピリピリとしみる。風呂から上がった後は魚を捌く元気がなかなか出てこないがこれは私の持ち場である。

アブラコを刺身にしてテーブルに並べる。すると女房がバツの悪そうな面持ちで冷蔵庫からマグロとイカの刺身を出してきて横に並べた。何と間が悪いのだろう。大きいホッケを2匹だけ煮付け用に下ごしらえしたが、「魚を沢山買ってあるので近所にあげてもいいですか」と尋ねてくる。「釣り大会の時は魚を買うな」と言いたいところだ。しかし、釣れなかったときにはどう言い訳したらよいのだろう。口を尖らした女房を想像してグッと口を噤んだ。



本日の全釣果

魚の行方

昨年の11月大会で釣ったカジカが冷凍庫に残っている。冷凍したワカサギもかなりの量だ。今回のものを冷凍庫に保存する隙間はないようだ。酒を飲んでしまう前に、仕事でお世話になっている方のところに持って行く。クーラーボックスを開けてホッケを渡し、ついでにカジカはどうだと聞いてみる。2匹とも遠慮無くもらってくれた。彼には「そば打ち道光会」で指導を受けるなど何かとお世話になっている。たまたま一緒に酒を飲んだときに、「趣味は何ですか」と聞かれたので、アレコレと講釈を付けながらこれまでの釣果

等を吹聴したのだ。

職場の人間なら、私の得意げな話が長くなりそうだという苦い経験から、釣りの話を遠ざけているのを感じているのだが……。それでも行き場の失った魚は明日職場で配ることにして一旦クーラーボックスに保冷剤を入れて保管する。

次の日、保冷剤を追加して職場へ持っていった。職場では年配の女性職員が手分けして若い職員にも持って帰らせてくれた。最近の若者は魚を捌くことはしない。せいぜい切り身を買って焼くだけだ。独身者は調理済みのものをコンビニで買うのが精一杯なのだろう。そしてその年配の女性職員も自分では捌くことができないので夫にさせているというのだ。

最近スーパーでカジカそのものを並べているのはあまり見たことがない。鍋用にときちんと切り分けたものをパックにして置いてある。アブラコにもいい値が付くようになった。スーパーで切り身にして売られていた45cmほどのアブラコ1パックに千円という値札が付いていた。TVの釣り番組「ザ・フィッシング」で、チヌ釣りの最中にアブラコがかかり、その釣り人がアブラコは高級魚だと言っていた。その高級魚を狙って今年一年がんばろうと思う。